

研究結果報告書

研究結果

本研究は、まず「源氏物語における七夕伝説と『長恨歌』」という題で研究をまとめた。それから「日本の七夕伝説の「願い」 『長恨歌』との結びを中心に」をもテーマにした。それは中古中世を中心とした中日比較文学・文化の研究であった。

中国の七夕伝説には星神逢合説話・西王母伝承や浮槎・支機石や天女羽衣・水浴の三系統がある。また民俗では乞巧がある。日本の古代には、古伝承と中国の七夕伝説が結びついて展開を見せ、織女が「鵲橋」を渡ることから彦星の「渡船」に変わった。それが一回目の変容である。その後、平安期に入って「長恨歌」が伝わり、日本文学に絶大な影響を与えた。中国の「長恨歌」では、玄宗皇帝と楊貴妃が「牛郎」と「織姫」に願いをかけて巧を乞う。日本の題材の作品では「七月七日長生殿、夜半無人私語時；在天願作比翼鳥、在地願為連理枝；天長地久有時盡、此恨綿々無絶期」とある「盟誓」「誓言」から「逢瀬」「契り」へと、玄宗皇帝と楊貴妃を「牛郎」「織姫」にだぶらせ、即ち生死の契りを交わし、永遠の愛を遂げるが、乞巧は別の内容で受容された。

『源氏物語』の男女主人公の恋愛を描くプロットには、星神逢合説話が根幹をなしている。一方裁縫の腕が上がることを願う乞巧についても、また松風巻では浮き木と重ね合わせている「浮槎」、さらに宇治十帖では、「袂襖」の七夕の姿さえ見られたのである。ゆえに、『源氏物語』には中国の七夕伝説の三つの系統が内在して受容されていたのではないかと考えられる。即ち日本には三つのパターンの七夕伝説がある。(1)一つは乞巧、(2)もう一つは浮槎・支機石である。(3)さらに一つは「長恨歌」の後半部分の七夕伝説の変容である。この三つ目は日本の受容の特色の一つである。

「彦星」と「織り姫」の恋愛や「願い」(誓願)を語る七夕伝説は主に中国文学からの影響である。特に、平安時代「長恨歌」を受容した後、和歌や物語、日記などにおいて、七夕伝説の「願い」「誓い」は「契り」且つ「恨み」へ移行した。さらに願文などを通して、甚だしく仏教へと傾斜したと見られる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表(題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

1. 「『源氏物語』における七夕伝説と「長恨歌」の関係考」“都市・伝説・歴史：学術の中の日本文学研究”をテーマにした中国日本文学研究会第12回年会及びシンポジウム 2010.8. 吉林省 延辺
2. 「『源氏物語』における七夕伝説再考 古注釈を読むことから」(発表予定) 中国人民大学外国語学院 2012.2.25

論文(題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

1. 日本東京外国語大学大学院「異文化の出会いー『源氏物語』と「長恨歌」の関係再考」《往還と横断とー地域文化研究から総合国際学へー》2010.3 609-619 頁
2. 「日本の七夕伝説の「願い」 『長恨歌』との結びを中心に」は投稿中。

書籍(題名・著者名・出版社・発行時期等)